

ユマニチュードでケアが変わる ～患者とのより良い関係作りのためにユマニチュードの基本を学ぼう～

1. はじめに

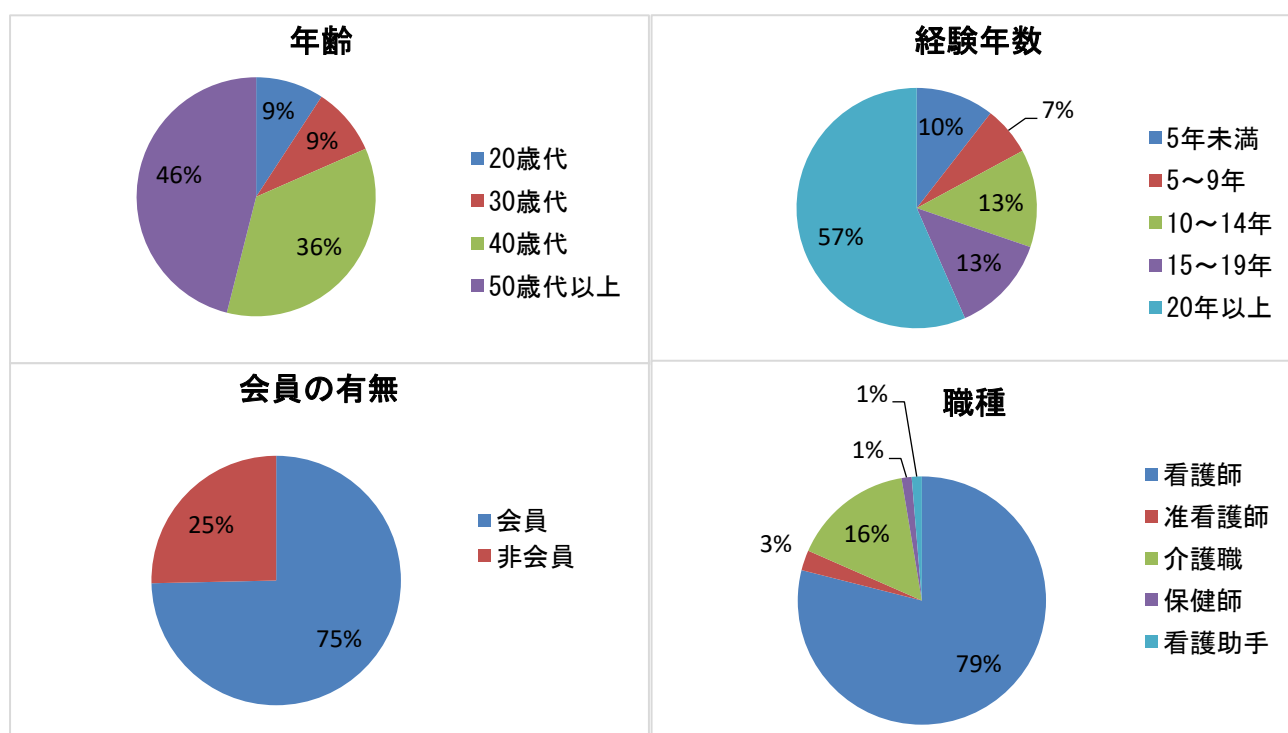
近年、医療現場では看護師の離職率上昇、感情労働の負荷、慢性的な人員不足が課題となっている。特に、対人ケアが中心となる看護職は、患者とのコミュニケーション負担や多重業務により、バーンアウトや職業満足度の低下が深刻化しており、看護師自身のウェルビーイング向上を図り、心身のセルフケア方法を獲得し、職場環境の改善を図ることが必要となっている。ユマニチュード (Humanitude) は、「見る」「話す」「触れる」「立つ」の4つの柱を通じて、人間らしい関わりとケアの質向上を目指すケア技法であり、看護師自身の心身の安定にも寄与することが報告されている。ユマニチュードの技法を習得することで、患者とのより良い信頼関係の構築が促進されケアの質向上、感情労働の負荷軽減が図られ、4つの柱を共通言語としたチーム連携につながるものと期待できる。そこで、看護の原点に立ち返りながら、看護師のウェルビーイングを高め、医療現場の持続可能性を向上させることを目的に、ユマニチュードの基本概念と実践を学ぶ機会として本研修を企画した。

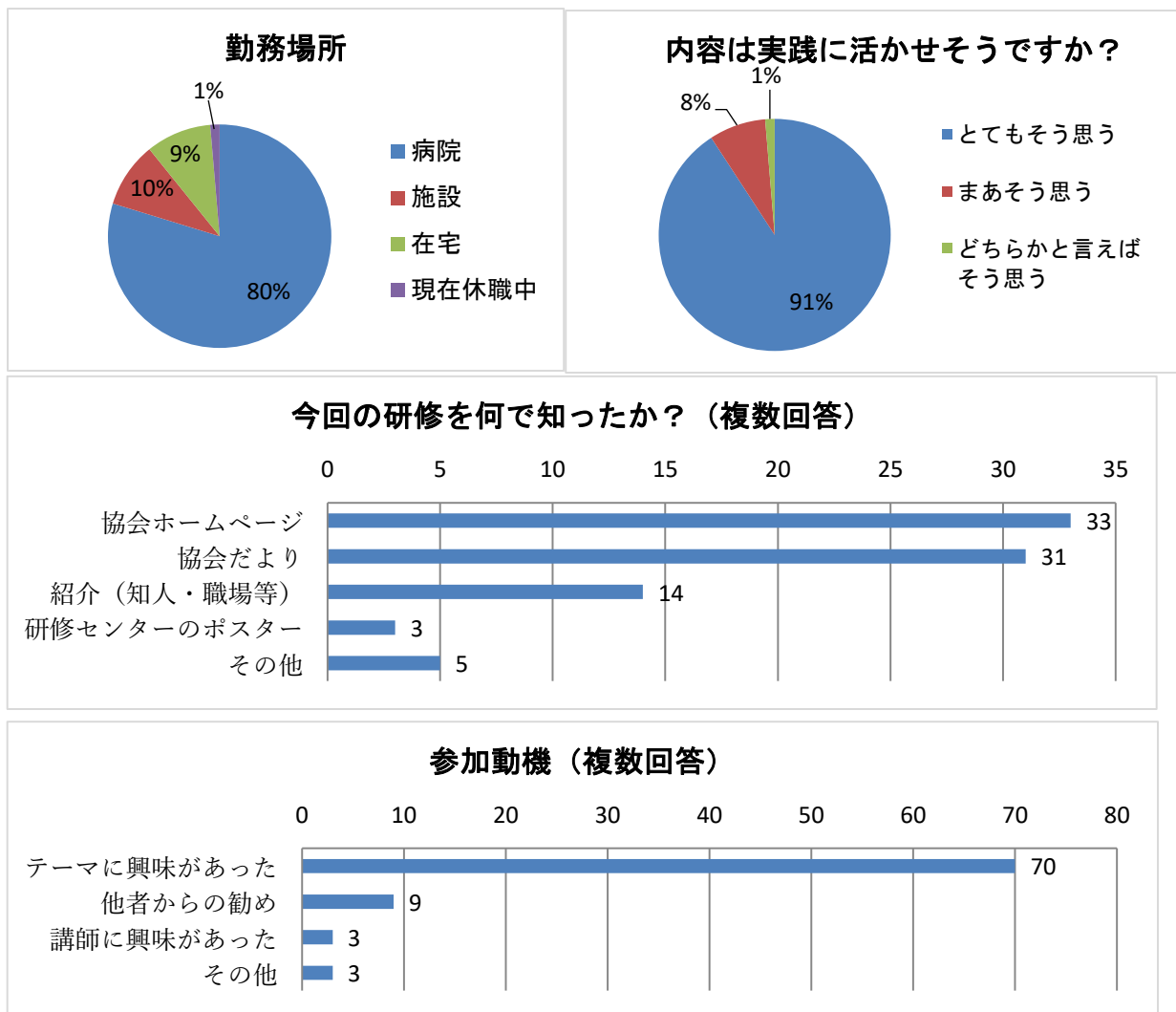
2. 概要

- 1) テーマ：「ユマニチュードでケアが変わる～患者とのより良い関係作りのためにユマニチュードの基本を学ぼう～」
- 2) 日時：2026年8月8日(土) 13:00～15:30
- 3) 内容：①講義「ユマニチュードの基本概念」
社会医療法人財団白十字会 ユマニチュード認定インストラクター 山浦由紀子先生
②実演・演習
③質疑応答
- 4) 場所：ながさき看護センター
- 5) 対象者：病院・施設で働く保健師・助産師・看護師・看護補助者・介護福祉士
- 6) 参加者：83名(会員63名、非会員20名)

3. アンケート結果

- 1) 回収数(回答率)：79名(95.2%)
- 2) アンケート調査結果





3) 自由記載

- ・4つの柱を講義頂き、実際に体験して、患者さんに接する基本だけで、むずかしく感じた。もっと、細かな技術や哲学まで詳しく知りたくなった。
- ・改めてケアの大切さに気づかせていただきました。エビデンスに基づくケアを今後も意識して提供していきたいです。
- ・すごく面白い内容でした。今まで受けた研修のなかで一番楽しかったです。
- ・いつも患者さんの部屋を出る時は「また来ますね」と伝えていたのが良いことなんだと知れてよかった。続けていきたい。
- ・基本を再確認できました。明日からの実践に少しずつでも取り入れていけたらと思います。
- ・看護師のみでなく、看護補助者やセラピストなど多職種にも広めたい。看護師だけでは限界があり、他の職種と協働して取り組むことが、看護師の疲弊を防ぐことにつながるのではないかと思います。
- ・病院でユマニチュードに取り組んでいるが、知識をアップデートできていなかったため参加した。改めてしっかりと学ぶことができ、演習もでき、次の勤務から頑張ろうと思った。認知症の人だけでなく活用できると思う。
- ・急性期病院で勤務しており、業務に追われ、なかなか患者に寄り添った看護ができていない現状があった。看護の基本をあらためて考えさせられた研修だった。
- ・高齢者の視野の狭さにびっくりした。患者さまの目線に立って看護していきたいと強く思った。
- ・ユマニチュード講義実習はとても勉強になった。早速、当院に戻り実践し、認知症の患者さんが歯磨きをユマニチュードの方法で行うことができた。職場で研修企画運営を行いたい。

4. まとめ

本研修では、ユマニチュード認定インストラクターの山浦由紀子先生より、「見る」「話す」「触れる」「立つ」の4つの柱を中心に、ユマニチュードの基本的な考え方と実践方法について学んだ。講義だけでなく、実演を通して実際に技法を体験することで、患者の視点に立った関わり方や、一つひとつのケアに意図を持って関わることの大切さを実感する機会となった。

特に、認知症の患者を「困った患者」と捉えるのではなく、その人の世界に寄り添い、その人らしさを尊重する関わりの重要性を改めて学ぶことができた。また、「見る」「話す」「触れる」「立つ」という基本的な関わりは、認知症患者に限らず、日々の看護の基本であり、日々の実践においてすぐに活用できるものであると思われた。

今回の学びは、それぞれの職場で共有し日々のケアの中ですぐに実践できるものであった。ユマニチュードを通して患者とのより良い関係を築き、患者、看護・介護職双方にとってより良いケアにつながることを期待できる研修となった。

5. 研修の様子（写真）

